

地理と国防で考える邪馬臺国へのたどり着き方

菅井英明

2019・4-7

阿波 鳴門古事記研究会発表

大陸と日本の関係性

日本は古代から大陸とは交易はしたいが攻め込まれると困るという関係にあった。

※大陸との交易の歴史は古く、殷の通貨だった子安貝は沖縄産である。

地理と国防の重要性

そのため、地理を利用して、安易に攻め込まれないように工夫をしていた。

例 琉球王国 識名園

那覇市の首里城の近くにある琉球庭園だが、「勸耕台」という展望台があり、そこに立つと東西に見えるはずの海が見えないように工夫されている。冊封体制下では、大陸の使節をここに連れてきて、沖縄は小さい島国ではないと「嘘ではないが本当でもない」トリックを喧伝していた。

邪馬臺国の位置を伝えた倭人もこのような「トリック」を使ったのではないか。

邪馬臺国四国山上説の弱点は行程

邪馬臺国が四国山上にあったのは間違いないが、果たして魏志倭人伝のいう通りにたどり着くかが問題である。

一般的に九州説も近畿説も行程を記述道理に読まず、どこかで記述が間違っていると考える。ただし九州上陸（末盧国 松浦市）までは共通している。

九州説

南に水行するところを無視する。「水行かまたは陸行」と解釈。それでも投馬国にたどり着くには水行しなければならないので結局破綻する。

近畿説

南南へと下がるとされている一般的な理解を曲げてどこかで東に行くとする。南は東の間違いであるとしたり、九州を軸に日本の東が南となるようぐるっと90度回転した地図（混一疆理歴代国都之図など）が存在することを根拠とする。

四国山上説

地理的には近畿説に近いはずだが？果たして無事たどり着けるのか？

どこにトリックがあるのか

貿易はしたいが攻め込まれては困る倭人政権は、邪馬臺国の場所を自分たちが使う正確なルートで教えることはできないが、魏の使節や魏皇帝自身が訪問する可能性もあるので、嘘も教えられないという苦しい立場にあった。そこで「嘘ではないが本当でもない」トリックを仕込むことになった。

少なくとも5カ所程度、正確な場所を教えないうためのトリックが仕込まれている。

トリック1 一大国とは壱岐ではない！

壱岐は対馬同様古代からよく知られた場所で、対馬の呼称が定着しているのなら壱岐も「伊支」のように書かれたはずだが、一大国という曖昧な表現になっている。一大国は壱岐とは限らない。対馬と違って島とも書かれていない。

大国と言っているのに人口が3,000戸しかなく、それでも食料の確保が追いつかないので南北と交易をしているとある。

対馬と一大国の間の海は瀚海（カン海）という海になっている。カン海であり得るのは瀬戸内海への入り口である赤間関（下関）の「関」ではないか？

トリック2 一大国から南に行くとは言っていない

海を一つ渡る（また、一海を渡る。千余里）とあるが、南に行くとは言っていない。

トリック3 海を渡ると水行は違う

対馬→一大国、一大国→末盧国は海を渡る（一海を渡る）という表現になっているが、投馬国から水行（水行二十日）という表現になっていて使い分けられている。

トリック4 南にあるとは言っているが南に行くとは言っていない

投馬国と邪馬臺国は不弥国の南にあるとは言っているが、不弥国から南に進むとは言っていない。進む方角ではなく緯度のことではないか？

トリック5 投馬国の次の上陸地点が書かれていない

投馬国を出て水行した後どこかに上陸してから陸行するが、どこに上陸するとは書いていない。

地理的条件

当時の航海技術や地理的条件を無視する訳にはいかないはずだが、この点はあまり注目されていない。倭人伝から地理的条件として分かることは、

1. 途中の末盧国を含めて、素潜りでアワビを採る描写がある。海士文化のある南国に向かっていているのは間違いない。
2. 伊都国、奴国、不弥国等「国」となっている同士の距離がそれぞれ10kmしかない（100里＝魏の短里で最大10km）ところから、当時の国は今でいう郡程度の規模であって今の県の規模ではない。邪馬臺国に隣接して周囲には21カ国あると書かれている。邪馬臺国の周りに円を書くようにあったとすると、邪馬臺国は周囲210km、面積3,509km²程度の小さい王国であった（徳島県の面積4,145km²）。
3. 末盧国から伊都国まで500里（最大50km）と離れていて、途中に国がないので、この間に山脈があって峠を越えると考えられる。
4. 水行とは山や陸地を横手に見ながら陸地に近いところを船で進むことで、イメージとしては島が多数見える瀬戸内海のような穏やかな海および川のことである。
5. 記の允恭天皇・神功皇后の記述から考えて吉備と穴門（長門）・周防・宗像は協力国であった（土笛など独特の文化があるので別の国だったであろう）。しかし九州の豪族はまだ協力的ではなく九州上陸は危険であった。
6. 邪馬臺国のすぐ南に交戦中の狗奴国があつて最短ルートを妨害した可能性もある。

四国山上王国へのたどり着き方

対馬

↓

宗像郡（一大国）

↓

海流に乗って響灘へ出る。関門海峡および小瀬戸を抜ける技術はまだなかったので長門に上陸した。

↓

長門（末盧国 穴門）

↓ ※旧R316（大ヶ峠（おおがたお）を超える）か

山口市（伊都国）

↓

防府市（奴国）

↓

徳山（不弥国）

↓

船に乗り換え山陽側を島・陸地を見ながらの航行。大陸人にとってこれは水行であった。

↓

鳴門海峡を超えて四国を東周りに進む技術はまだなかったと考えられる。来島海峡も抜けられず、代わりとなる大屋島、岩城島ら諸島を縫う航路も未発達か。

屋代島、中島、興居島を左手に見ながら水行。

↓

松山（投馬国）

↓

陸を見ながら更に南下

宿毛に上陸 ※外海には出られなかった。

↓

陸行一ヶ月 ※何らかの理由で R 3 3 や R 1 9 7、R 4 3 9 は使えなかった。R 5 6 を歩かされ南国市から R 1 9 5 に入った。

↓

四国山上王国

倭人の最短ルート

狗奴国の妨害がなくなり航海技術が発達すれば倭人は最短ルートで山上王国にたどり着く。

1. 宗像に南下せず、沖ノ島にいけば対馬から最短で響灘に出られる
2. 小瀬戸を航海して上陸せずに直接防府に出る
3. 大三島・岩城島を抜ける。来島海峡も抜けられたかもしれない。
4. 小鳴門海峡を超える

対馬

↓

沖ノ島（宗像大社沖津宮）

↓

小瀬戸を直接抜け瀬戸内海へ

↓

瀬戸内海を陸を見ながら東へ。

大三島・岩城島などの諸島の間を縫うように航海。

讃岐の志度（苫張）到着（投馬国）※投馬は海岸沿いの家「苫」。

続いて→狗奴国の妨害がある場合、陸路を白鳥（しろとり）経由で板野に抜けたであろう。

↓

妨害が無い場合、船で東周りに南下

↓

小鳴門海峡を超える

上八万に上陸 意富門麻比賣神社（おおとまひめ 宅宮神社）

↓

吉野川遡上（季節によって帆で遡上、それ以外紐で引く）

矢野や板野、石井を回った後

↓

四国山上王国

響灘の存在は秘密であった

沖ノ島、響灘と小瀬戸は存在が知られると簡単に都を侵攻されてしまう可能性が高く、秘中の秘とされた。

倭人は偽の伊都国を九州と山口に作り、魏の使節にはここで交易の実務をさせて実際の四国山上王国には来させなかった。祭祀を取り仕切る卑弥呼に会う理由も特になかったのであろう。

うっかり長門に漂着した外国人にはここが伊都国だと説明し日本海を東進させなかった。

意富加羅(おおから)国の王子、都怒我阿羅斯等(つぬがあらしと)が穴門(長門)に漂着したが、伊都都比古が現れ日本の王であると名乗ってこれ以上先に国はないと言ったが、本物の王ではないと見破られたという話がある(紀 垂仁天皇2年条の分注)。

ただし、あまりに秘密にしすぎて、やがて皇室・豪族の間でも忘れられてしまう事態が発生する。仲哀天皇と武内宿禰はこのことを知らず、倭の西には国がないと思っていた。

しかし皇后の息長帯比売命(おきながたらしひめのみこと、神功皇后)は出身が息長氏(長国、越、近江国坂田郡)で日本海・瀬戸内海に詳しいため越や沖ノ島から見れば西に外国があることを知っていて、三韓征伐を行った(記 仲哀天皇、神功皇后)。

なぜ伊都や那賀(那珂)がたくさんあるのか

奴は漢字の上古音で[nag]という発音であり、ナガを指していたと考えられる。

西日本に無数に伊都和那賀があるのは、もともとは、伊都和那賀の複製(攻め込まれたときの囹)を作っておいて国防に備えたものと考えられるが、後に都市発展モデルになったのであろう。

讃岐、伊予、吉備、筑紫、紀伊まで伊都和那賀の複製が作られ、だんだん伊都和那賀を分けるのも面倒になったか、阿那(近江・坂田郡阿那郷)、伊那(長野県伊那郡)という地名も現れるようになる。

元寇

倭人の戦略に見事にはまって新羅・元連合軍は博多湾と松浦に押し寄せた。長門、沖ノ島、見島は大陸の襲来に備えていたが、ついに大陸には知られることがなかった。日本海を海流に乗って行き来し瀬戸内に入ることができることが一般に知られたのは江戸時代の北前船航路が開通してからである。

倭人は嘘つきである

倭人の使者が時々嘘をつくのは薄々大陸では分かっていたようで、旧唐書(巻199 上 東夷伝)で日本を名乗った人物は嘘をついているのではないか(その人、入朝する者、多く自ら矜大(きょうだい)、実を以て対(こた)えず。故に中国焉(こ)れを疑う)と記されている。

なお元(呉萊(1297年-1340年)『隣交徴書』)は元寇後でも日本を「倭奴」と呼んでいるのが興味深い(今之倭奴、非昔之倭奴也)。

結論

魏志倭人伝の記述には倭人の国防の観点が含まれており地理を利用して倭人は大国に侵攻されない工夫をしていた。倭人の外交は現在の日本政府より巧みであった。

参考資料

東皓傳「芸予諸島付近における古代航路の形成とその展開」歴史地理学会

呉萊『隣交徴書』石原道博(翻訳)『新訂旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝—中国正史日本伝』〈2〉岩波文庫、1986年、216頁

杉村孝夫 2010「九州方言の諸相」福岡教育大学紀要 第59号第1分冊 49-64

藤堂明保 1978 「学研漢和大字典」 学習研究社